Shake Hands ～ぼくのはじめての…～

KOH

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｓｈａｋｅ　Ｈａｎｄｓ　～ぼくのはじめての…～

【Ｎコード】
Ｎ６２５８Ｚ

【作者名】
ＫＯＨ

【あらすじ】
幼い頃より転校を繰り返してきた神居海斗には友達の価値がわからなかった。あの日、少女・帝田結衣に出会うまでは――――。
どこにでもある田舎の小学校に転校してきた彼は、四年一組の教室で自らを幽霊と称する少年、新垣結希と出会う。
一人寂しく教室で伏せ、学校にきているのに嬉しそうではない、彼の様子に海斗はかつての自分の姿と重ねた。
少年は決心した。
「新垣くんを――――僕のはじめての『男』友達とする」

複雑な人間関係、環境、感情が交差する個性豊かな四年一組！
かつて誰にでもあったかもしれない幼かった日々を思い出させる、
ありふれたな日常を描いたちょっぴりシリアスな学園コメディ。も
しかしたら恋愛もあるかもね。

プロローグ　～はじめての田舎～（前書き）

はじめまして。
つたない文章でございますが、どうかお付き合いいただけると幸いです。
作者がなにぶんライトノベルが好きですゆえ、多くの作品の影響を受けた文章になっています。

プロローグ　～はじめての田舎～

――あなたにとってわすれられないひとをおしえてください――

――あなたにとっていちばんたいせつなひとをおしえてください――

――あなたがしあわせにしたいとおもうひとをおしえてください――

――あなたにいばしょをあたえてくれたひとをおしえてください――

――あなたがそばにいてほしいとおもうひとをおしえてください――

転校前にこのプリント渡されたけど、この質問は意味不明だ。
先生は『それはまだ書くときじゃない。また一人で書くものでもない』とかなんとか言っていたけど、だったらいつ、何人で書けばいいのか。
質問しても『いずれ分かるときがくるよ』と意味深に微笑んだだけで何も教えてもらえなかった。
まったく大人というのは分からない生き物だ。
僕もいずれなるものだが少なくともこんな不誠実な大人にはなりたくない。
……でも、先生の話を信じても損はないだろう。一応、とっておいてあげることにする。
不誠実な大人には子供が誠実に対応してあげるのが賢いだろう。
僕はプリントを脇に置かれたリュックのポケットにしまい、ふと車窓から外を見た。
どうやらトンネルから抜けたらしい、目の前には田園風景が広がっていた。

ここが田舎かー。緑に溢れて、空気も美味そうで、都会にしか住んだことのない僕にとっては、目に映るすべてが新鮮だった。
なるほど、初めての故郷としては良い場所だ。
…と、ここはどこだっけ？愛……なんとか…。
「母さん、ここどこだっけ？」
声をかけると電車に揺られて眠りこけていた母さんが目を覚ました。
「あ…？えー…愛知県。愛知県宝殿市好初町…。ったく、良い気持ちで寝てたのに…」
寝ぼけ眼を擦りながら不機嫌そうに母さんは答えた。
「あはは、そうだっけ？ごめんごめん」
前も聞いたっけ？困ったな、この歳でボケが始まったなんて笑えないぞ。
そっか、『ほうでんしすきぞめちょう』。
変わった名前だな、と頭の中で反芻しながら思った。
今まで住んでた場所にもおかしな地名あったけどね――僕の生まれ故郷――北海道の町とか。
京都もかなぁ、あ、埼玉県もひらがなの名前の市とかあったし。
でも東京の弥生町も複雑かもしれない。あれでどうして「やよい」と読むのだろう。
そう考えるとこの日本という国に、こんなおかしな地名があってもおかしくないのかもしれない。
「…と、いと…！海斗！」
「は、はいっ！何？」
「まったくまたなんか考えてたでしょう。もうすぐ着くよ、準備しな」
言われて返事を返し、僕はリュックを背負った。
――いけないね。父さんの遺伝らしいが、僕は考え事を始めると人の声が届かなくなる。
そんな父さんといえば、今は仕事の都合で僕の妹と海外にいるらしい。未だ実感わかないんだけどね。

父さんと母さんが離婚しただなんて。
大企業にサラリーマンとして務める父さんは、転勤を何度も繰り返し、僕ら家族を振り回した。
僕には想像もつかないけれど企業と言うからには、きっと重い責任ののしかかる仕事だったのは何となくわかる。
となれば、当然それに伴う精神的ストレスも非常に大きなものとなる。
だから、父さんは単身赴任を嫌っていた。
よく説教じみた口調で『家に帰ってきたときに、おかえりって言ってくれる人がいるって素晴らしいことなんだぞ』と耳がタコができるくらい聞かされた。
僕にはよくわからない――と、前まで思っていたけど、父さんと妹――蒼空(そら)がいない食卓、リビングを見て寂しいと感じた。
妹にただいまと言ってもらえない。父さんにおかえりと言えない。
父さんに置き換えれば、母さんにおかえりと言ってもらえない。
父さんが嫌だったのは、これだったのかな。

母さんは次第に怒りっぽくなっていった。
最初は良かったのかもしれないが、めまぐるしく変わる環境、僕達への心配、様々な悩みを抱えていたのだろう、体調も崩すことも珍しくなかった。
夜眠っているときに、父さんと母さんが喧嘩して罵声を浴びせ合っているのが聞こえてくることもあった。
互いの感情にすれ違いが生じてしまった。その結果が離婚。
僕は母さんに引き取られ、二人で落ち着いて暮らせる場所を探し、この好初町にやってきた。
蒼空も元気でやってるといいな――――。

電車を降りてから徒歩五分。
新居はすぐに見つかった。ここ最近流行りの様式を取り入れた一軒

家。
父さんが僕達のために、建築会社に依頼して建ててくれたもの。
玄関に入ると独特の木の匂いと、木工系のボンドの臭いに鼻を刺激された。図工室の臭いと言ってもいいかもしれない。
靴を脱ぎ居間に入ると、ラックや机などの大型家具はすでに配置され、引越し業者さんが仕事のしるしを残していた。
引越し前に荷造りで詰めたダンボールも、隅に幾重にも積まれている。
母さんはその光景にふぅ…とため息を吐き、
「あんたは二階と自分の部屋造ってきな。一階は母さんがやっとくからね」
ジーンズのポケットからゴムを取り出し、その長い髪を後でまとめあげた。やるきモードの時の癖だ。
僕は適当に返事を返して、階段を上がっていった。
ここで僕の新しい生活が始まるんだ。

「やっと…終わった」
引越し作業なんて何度もしてきたけど、今回は特別だ。
まず一軒家である点。
今までは安いアパートを借りて暮らしていたから、そこまで部屋作りにも時間はかからなかった。
二つ目は人手が足りない点。二人いないだけでここまで疲れるとはね。猫の手も借りたいという言葉はこういうとき使うのかな。
自分の部屋で空っぽのダンボールに背中をあずけ、僕はリュックから一枚の折りたたまれた厚紙とその中に同封された写真を取り出した。
厚紙には前の学校のクラスメイトと先生の寄せ書きがドーナツのように輪を描いて書かれている。
中央には『いつまでも僕達は仲間だ！三年二組！』と決まり文句の

ように。
こうして寄せ書きをくれたクラスメイトは友達とよべるほど親しくもなかった。ただ同じ空間にいただけの存在。仲間なんて高尚なものではない。
はは、と乾いた笑いが漏れる。
これをこんな冷めた目でしまう自分が少し嫌いだ。でも仕方のないことかもしれない。
あの頃の僕は毎年、一時期は学期ごとに転校をしていた。
そんな状況の中で、友達を作りたいなんて思うほうが異常だ。
すぐに別れてしまうのに。離れ離れになってしまうのに。連絡なんてそのうち取らなくなるに決まっている。
一年、一学期なんて弱い繋がり、すぐに切れるに決まっている。悲しいけどこれが現実だ。
だったらもう開き直るしかない。
最初から友達なんていらない。それが僕の出した結論だった。
下手に仲良くすれば、別れが辛くなる。転校するたびに誰かが悲しむ顔なんて見たくない。
――というのが、もう過去の話になってしまうなんてね。
僕は寄せ書きの中に、ピンク色のラメの入ったペンで書かれた文字を見つけた。
『ゆいとかいとくんははなれても変わらない。ずっといっしょだよ。また会おうね』と女の子の可愛らしい文字。
その下には『ていだ　ゆい』と名前が添えられていた。
初めてだった。
この子が僕に友達が欲しいと思わせてくれた。
いや、この子とは離れても友達でいたいと思わせてくれた。
「また会おうね、か。はは、ありがとう。僕もだよ」
なんというか『太陽』みたいな女の子だった。
笑顔も、声も、心根も。
一緒にいるとすごく温かいけれど、彼女があまりにも近くにいると、

感じられるほどに僕の体温は高くなった。
かといって離れていると、あの温かさがいとしくなった。
学級の集合写真に目をやると、先生よりも、どのクラスメイトよりも、彼女が輝いて見えた。
隣には僕がぎこちない顔で笑っている。
まったく、もっといい顔をしろよ。せっかくの集合写真だぞ。
結衣ちゃんと一緒に写った写真はこれだけだ。ちょっぴり物足りないけど、この写真は見るだけで彼女との日々を思い出させてくれる。
一枚だけだ。一枚だからこそ大切にする。
この寄せ書きと写真は、ずっと僕の宝物だ。絶対に失くさない。
僕は勉強机の引き出しを開き、この二つをしまった。
ありがとう。君のおかげで、新しい学校でも友達を作っていけるよ。

プロローグ　～はじめての田舎～（後書き）

プロローグ読了お疲れ様でした。
もしよろしければ冒頭の質問に答えてはくれませんか↑
……冗談です。そんなに引かないでください。
いや、むしろこの小説のこそばゆい文章に、背中がかゆくなった人がいるかもしれません。
人間の感情を如実に表した結果こんなことに…。

おそらくこんな文章が続くと思います。
いやー、似合わないなんて自覚してますから。
もしよければこれからもお付き合いお願いします。

一章　小田桐小学校

あれから数日経ち、春休みも開け、今日は待ちにまった始業式だ。
僕を迎えてくれるかのように、道の脇には桜が満開に咲いている。
吹雪く花びらは通学路を歩く僕にたいしてのエールのようにすら思える。
新しい友達や先生、校舎、校庭がどんなふうなんだろうと想像するだけで胸が躍る。
学校にいくというだけでこんな気持ちになったのは初めてだ。
友達を作りたいと考えるだけで、こんなにも世界が違って見えるなんて。
ある意味ここから僕の人生は作られていくのかもしれない。
そう、これは僕の青春の一ページを綴る第一歩だ。
……あー、ダメだ。そう考えたら少しだけ緊張してきた。
転校なんてもう慣れっこだと思っていたのに、手に汗がにじみでているのがわかる。
ダメだ、あまり緊張していると声が出なくて、暗い奴のレッテルを貼られてしまう。
今のうちに発声練習だけでもしておこうかな。
都会と違って、田舎の通学路は人が少なくて閑散としている。こんなことをしていても奇行と見る人はいないだろう。

家から二十分ほどして小学校に到着。
門扉の脇の表札には『宝殿市立小田桐小学校』と書かれている。
二階建ての横に広く伸びた大きな校舎だ。割と新しい造りをしているように思える。
でも今時二階建てなんて珍しいな。僕が今まで通ってきた学校はどれも最低三階まではあったのに。
僕は正門を抜け、来客口からあがり、上履きに履き替えて、職員室

の前へとたどり着いた。
扉を軽くノックし、失礼しますと断りながら入る。
「このたび、こちらに転校してきた神居海斗です。校長先生はいらっしゃいますか」
敬語の使い方なんてまるで分からないけど、それらしく繕って挨拶をすると奥の机に座っていた年配の男が立ち上がりこちらにやってきた。
「やあ、君が転校生くんだね。私が校長の敷島琢磨だ。よろしく頼むよ」
手を差し出されたので僕もすかさず、よろしくお願いしますと握手で反応した。
フランクな先生だ。大人にある威圧感がない。こちらの緊張を察して気を使ってくれているのだろうか。
「さて、始業式まであまり時間が無い。君のクラスと担任の先生だけ今のうちに紹介しておこう。柴山先生」
呼ばれて近くの事務机から、名前を呼ばれた女性が返事をしてこちらへとやってきた。
女性は校長に軽く会釈をしたあと、
「初めまして、四年一組担任の柴山幸といいます。音楽の先生をしています。これからよろしくお願いしますね」
と、お辞儀をしてきた。
こちらこそ、と僕も頭を深く下げる。
「うむ、自己紹介も終わったことだし、さっそく体育館へ移動しよう。ついてきたまえ」
校長先生が職員室で号令を出すと、部屋にいた先生たちが一斉に名簿を持って退室していく。
僕も二人の先生の後ろに付きながら、渡り廊下を歩く。
女の先生が担任なんて一年生の時以来だ。優しげで母性を漂わせている。
子持ちなのかな。歳は三十代前半といったところか。

アジアンテイストな彫りのある顔立ちで落ち着いた雰囲気もあり、えもいわれぬ魅力を感じる。
こんなふうに柴山先生を特徴を挙げているうちに、体育館の入り口までやってきた。
僕はここで待機しているように言われ、校長先生と他の先生は中へと入って行った。
少しだけ覗き見ると、どうやら僕以外の在校生はすでに入っており、整然とした並びで体育座りをしている。
「……え、なにこれ。ちょっと待って」
思わず声が出てしまった。

明らかに生徒数が少なすぎるのだ。

数にしておよそ六十人くらいか。
どういうことだろう。まだ全校生徒が集まってないのだろうか？
いや、そんなことはない。もう始業式恒例校長先生の長い話が聞こえてきている。
だとしたらこれが全学年の総勢？いやいやいやいやいや。
こんな学校初めて見た。これが田舎の学校ですか。初っ端から驚かされましたよ。
へぇー、こりゃすごい。なるほど、ならば校舎が二階建てというのも頷ける話だ。
『それでは転校生を紹介します』
ヤバ、もう僕の出番！？どうしよう、呆気にとられて話そうとしていたこと全部忘れた！
え、ちょ、まて、落ち着け、落ち着こう、そうだ、落ち着こう…し、しんこきゅ――
『神居海斗くんです。どうぞ』
ちょ、せめて深呼吸する時間をください！ああ、ちょ、何？後から何か優しげな先生らしき人が背中をおしてくるんだけど！？

ま、ま、ま――――――、あーっ！

僕は体育館の中央へと投げ出された。
ここまで来るのに緊張して足と手が一緒に動いていたんじゃないかと、少し気になる。
……うわー、見てるよ。全校生徒が。一年生が、二年生が、三年生が、四年（略）
そうだ、いつもどうりやればいい。もう慣れているじゃないか、こんなこと。
ま、まずは自己紹介だ。
「――――――ッ……！」
まずい声が出ない！どうした僕、いつもの僕はどこにいった。
いや、落ち着け、もう一度。
「――――っ…あ……」
『ん？どうした？もしかして緊張してるのかな？』
校長先生、余計なことを！！ほら、生徒がざわめきはじめたじゃないか。
どうする…アイ×ル……じゃなくて！
『はい、ありがとうございましたー』
えー！ちょ、もう少し時間を…。ふぅ…。
肩を落として僕は体育館の隅へと移動した。
仕方ない…。これはもうクラス挨拶にかけるしかないや。

『校歌斉唱』
新緑映える　小田桐校
桜並木を　友にして
精気奮い立つ　我が学び舎よ
いざ我ら　大志を抱き
たくましく　うるわしく
共に育まん　この大地で

若草萌ゆる　小田桐校
流るる小川を　心として
闘志みなぎる　我が学び舎よ
いざ我ら　夢を求め
うちつれて　かがやいて
共に磨かん　この大地で

霞にそびえる　小田桐校
蛍の光を　友にして
英気養う　我が学び舎よ
いざ我ら　仲間と歩み
たすけあい　わらいあい
共に学ばん　この大地で

一章　小田桐小学校（後書き）

小田桐小学校校歌
メロディーは勝手に作曲してあげてください↑。
歌詞は僕の出身校を骨組みにし、ところどころ改変してあります。
ちなみに皆さんは、自分の母校の校歌、未だに歌えますか？

二章　四年一組

校歌なんて当然歌えるわけもなく、僕はただ呆然とその光景を眺めていた。
始業式が終わり、全校生徒が散っていく。
時を見計らって柴山先生が僕を呼び、再び彼女の後ろをついていくことに。
そうしてやってきたのが四年一組の教室。
先生が担任するクラスであり、僕がこれから一年間勉強し生活する空間だ。
ここにくるまでに聞かされたけど、この学校は一学年一クラスしかないらしい。
先生自身もここに異動してきたときには驚いたらしい。やはり珍しい学校なのだ。
共に教室に入り、先生は教壇に立つやいなや黒板に僕の名前をチョークで丁寧に、達筆に書く。
「さ、自己紹介をお願いします」
手についた粉を払いながら、先生が促してきた。
クラスメイトから好奇の視線を向けられ、少しだけ気負いをしてしまう。
だが、今度こそ失敗はしない。
「北海道からやってきました、神居海斗です。好きなように呼んでください。これからよろしくおねがいします」
すっ、と頭を下げる。
ハキハキと明るい声で話せた。少なくともこれで根暗レッテルを貼られる心配はいらないだろう。上出来だ。
教室内の生徒から歓迎…してくれてるのかな。拍手を浴びる。
「うん、ありがとう。神居くんの席はそこの席ね。それじゃ、ホー

ムルームを始めます」
僕は指定された席に静かに座った。
この学校はやはり特別なのだろうか。
普通、机は縦横に等間隔に配置されているものだけど、ここはコの字型になって机同士が隣接している。
ディスカッションやディベートをする時の配置といったら分かりやすいだろうか。
ざっと教室を見渡してみると、生徒は僕も含めて九人。男子が五人、女子四人。なんとも小規模な学級である。
先生が話を展開して行く。主に僕の事細かな紹介と、今後の日程等。
それからプリント配布。
そんなテンプレートみたいな展開の後…。
「それでは五分間放課にしますね」
そういって先生は教室から出て行った。
放課？五分間の放課…。放課後っていうのが学校の終わりだから…って、あれ？
なんだか混乱してきたんだけど…。放課って何だ？
周りを見渡すと皆、席を離れて———こちらにやってきた！
「ねぇねぇねぇ！神居くん！誕生日いつ？」
「血液型教えて！」
「趣味は何？」
「好きなひとはいるの？」
「スポーツは何ができるんだ？」
「北海道ってどんなところだい？」
「ったく、キョトンとしてんなって！」
きた。きたよ、転校恒例質問ラッシュ。
今までの僕だったら冷たくあしらったけど、今年の僕は違う。
「ま、待って、そんなに一度に答えられないよ」
「あ、ごめーん。転校生なんて珍しくてさー」
「あのさ、質問を質問で返して悪いんだけど…、放課って何？」

「えっ？放課は放課だよ。休み時間」
「何、それ？もしかして方言みたいなもの？」
「ん？そうなのかなー、うちらはいつも放課っていってるけど北海道じゃ言わなかったの？」
「うん。一般的には放課は放課後って言葉があって、一日の授業が終わった時のことを指すんだけど」
といったら、え――――っ！と驚嘆の声があがった。
僕とは逆に放課後という言葉そのものが初耳のようだ。
うーん、幾度も転校してきた僕だけど、愛知はなかなかにローカルギャップがある気がする。
とりあえず謎も解決できたところで、先ほどの質問に一つずつ答えてあげた。
それから自己紹介があって――

最初に質問してきたのは田山飛菜さん。元気がいっぱいだけど背の小さな女の子。
二人目は上條智沙さん。姉御肌気質のお姐さんタイプといった感じで若干大人びた雰囲気を持つ。
三人目は加賀由姫さん。短髪で少し大人しめ。田山さんとはご近所さんらしい。
四人目は川島秋さん。聞けば彼女も元々は転校生だとか。
五人目は佐伯康平くん。スポーツ万能、成績優秀のエリート。ちょっと敬遠してしまう独特の雰囲気を持っている。
六人目は城ノ内那由多くん。寡黙そうな男の子。
七人目は竜崎保純くん。スポーツカットでキメた活発でサバサバした男の子といった感じだ。

……あれ？そういえば八人目の子はいないのかな？
どこだろう。皆が周りを囲ってるから、教室の様子がよく見えない。
……見えた！人の切れ目から見えた光景は、机に伏せって寝ている

ように見える男の子が一人。
「ねえ、あの子は？」
遠くに見える男の子を指差して問う。
そうしたとき、少しだけその場の雰囲気に乱れが生じたように思えた。
明るく転校生を迎えるといった空気から、肌にじっとりとくる嫌な空気へ。
「あ、あー、そんなことよりさ、神居くんってかっこいいよねー」
川島さんが話をそらした。……ここはあえて言及しないほうが賢明か。
彼女の言葉にとりあえずおざなりな返事をして僕は席を立ち、あの子に近寄っていった。
その途中で後方から、『おい、そいつは放っておけって！』『えっ、神居くんって案外空気読めない系？』と、嫌な言葉を聞いたのは無視する。
「ねえ？」
声をかけるとその子は、顔だけこちらに向けて相変わらず伏せったままの姿勢で僕を見た。
「君は、名前なんて言うの？」
やんわりとした口調で聞いてみたが、次に返ってきた言葉を、僕は予想もしなかった。
「…ボクにはなしかけちゃダメだよ」
「え？」
「だから、ボクにはなしかけたらダメだって。このクラスで普通に生活したいなら…」
「…いや、質問に答えてよ。教えてよ、名前を」
すると男の子は、非常に億劫そうに、だけどどこか辛そうな声で答えた。
「……幽霊だよ」
「は？」

「幽霊だよ！」
いきなり大声で返された。彼の声に反応して他のクラスメイトの視線が僕らに集まる。
幽霊？どういうこと？仮に幽霊だとして何で姿が見えているんだろう？
いや、こんな考察するまえにそんなものはこの世に存在しないくらい、僕だって知っている。
自称幽霊くんは再び顔を伏せ、
「もう…二度も言わせないでよ…。ボクのことは放っておいて…」
くぐもった声で言った。その声色に少しだけ嗚咽が混じっていたように思えたのは気のせいだろうか？
放っておいてって…いや…でも、そういうわけにもいかないんじゃなかろうか。でも、個人の意見を尊重したほうがいいのか？
と、考えているうちに休み時間の終わりを知らせるチャイムがなった。
――まだこのクラスのことがわからないうちは、そっとしておいてあげたほうがいいのかな。

初日と言うことで授業はまだ始まらず、クラスの係や掃除当番、給食当番等を決めることになった。
僕はなりゆきで黒板係に決定。転校生ということで気を使ってもらい、割とどこの学校にも存在する仕事を任された。
そんなことよりも重要なことが二つあった
一つは幽霊くんについて。二つ目はこの学級に渦巻く人間関係や環境だ。
幽霊くんは休み時間こそ伏せっていたものの、この時間は真面目に起きていた。
顔をよく見るとあまり元気がなさそうで、寂しげで、つまらなそうに見える。
――なんとなく、昔の自分を見ている気分になった。

学校へ来てもたいして友達もおらず、ただ惰性と義務による脅迫観念で教室での生活をしていた――結衣ちゃんと出会うまえの自分を。
この係決めの時間の中でも僕は不審な点を見つけた。
一応、この係決めの形態には推薦方式があるのだが、あまり気の進まない仕事――トイレ掃除など――を決めるときには、必ず竜崎くんが『結希くんがいいと思いまーす』なんてわざとらしい口調で高らかと声をあげていた。
この発言によって、あの幽霊くんの本名が『新垣結希』という名前だということが判明した。
竜崎くんの意見には、新垣くんも『いいです。ボクがやります』と肯定していたが、顔をみればあれが不本意であることは子供の僕でもわかる。
大人の柴山先生はもちろん理解しているようで、一応新垣くんの気を察してか、『本当にいい？』と確認をとっていたが、それでも彼は、蚊の鳴くような小さな声ではいと返すだけだった。
そんな光景を見ながら女の子たちはクスクス笑っていた。席が隣同士の上條さんと川島さんが互いに耳うちをして陰口をしているような場面も見られた。
これは…いや、でもまちがいないよね…完全に――――

いじめ――――だ。

転校初日に嫌な事情を知ってしまった。
なんでどこにもあるんだろうね、これ。
本で読んだけれど、いじめというのは人間の本能レベルに置きうるものであるらしい。
そもそも人間はもとをたどれば野生で生活し、弱肉強食の理に漏れなかった生き物だ。
そのためどうしても上級階級に位置したいと願うものである。下級の扱いはひどいものであり、人権も尊厳も真っ向から否定される。

しかし、どんなに頑張っても不条理ゆえにそこにたどり着けない下級存在ものが、『ならば自分より更に弱い立場の人間をつくりあげよう。そうすれば自分に理不尽な矛先がむけられることもない』、という意識が無意識レベルで生じ、結果自分より弱いものを虐げる。そうした保身的生存本能の結果がいじめらしい。
また下級存在を自分の思うまま、利益のために動かせる。歴史にあった奴隷制度を見れば明らかである。
そして動物は本能的にそうした嗜虐心がどこかしらに存在する。
小さな子供がアリの巣穴の入り口をふさいだりアリをふみつけ殺したり、イナゴやハイエナが弱った獲物を集団で食い散らかすように。
基本自分以外の何かが弱っていく姿をみるのが好きなのかもしれない。
不良を社会不適合者とののしって悦に浸るも同じ。落ち度のある人間を叩くのは楽しいことだ。
ブログで失言をした芸能人のブログが炎上するように。
ここまでの理論をのべられれば、いじめが存在するのは必定と納得はできる。
だからといって、肯定はできないし、いじめられている人間を見殺しにしていい道理にはならない。
僕にだってそれくらいの良識はある。
僕は友達がほしい。きっと新垣くんだってこんな状況に満足しているはずがない。今の僕と同じ気持ちのはずだ。
毎日友達に会うことを楽しみに学校に来たいと思っているはずだ。
僕はこんな卑劣な空気を生み出している人たちと、友達になりにきたんじゃない。
本人が何といおうと構わない。僕は決めた。
新垣くんと友達になろう。
彼を――僕の初めての『男』友達とする。

三章　はじめての男友達

時限換算すれば今日は二時間目までしかなく、始業式を一時間目として本日の授業は終了した。
この学校は通学団制を導入しており、集団登下校が基本となっているようだ。
小田桐小学校の通学団は四つで構成されている。
北の好初町、東の想伝町、南の憂抱町、西の喜涙町。そしてこれらの町に囲まれた中央に小学校が位置するといった地理関係である。
僕はランドセルを背負い、教室を出た。今日は教科書を持って帰らなければならないので、肩にその重量がのしかかる。
登校時は軽かったのになぁ。行きはヨイヨイ、帰りはなんとやら。
校庭に出ると全学年生徒が通学団ごとに整列しており、僕は教室を出るのは少し遅めだったようだ。
急いで好初町の通学団に入ると、上級生がこちらを物珍しそうに見つめ僕にからんできた。
「へぇ、あなたが転校生。あ！あたしは竜崎真由。こいつはあたしの弟ね」
そういって真由さんは、男の子を肩を掴んで引っ張ってきた。竜崎くんだ。
「あ？ったく、何すんだよ真由姉！」
「あんた転校生くんにちょっかいかけてないでしょうね」
「はぁ？するかよそんなこと。いちいちうるせえな真由姉はよ」
「あんたいつも乱暴だから心配してやってんの！本当ごめんね、こんな弟で」
そういって真由さんは申し訳なさそうな顔をした。何か気を遣わせたみたいで申し訳ない。
いえいえ、と愛想よく笑って僕はその場を収めた。綺麗で優しい人だな、真由さんは。

竜崎くんは口が悪くて乱暴で、お姉さんに手を焼かせているようだ。
こういうのをやんちゃっていうのかな。
それともガキ大将？いや、もはや化石レベルの言葉だよね、これ。
二人のやりとりで今、気づいたけれど、そうか、竜崎くんも同じ通学団なのか。
ちょうどいい機会だし下校時に様子をうかがわせてもらうとしよう。

『さようなら』
「はい、さようなら」
全校生徒が集まったところで、朝礼台にたった校長先生に向かって全員がそうあいさつし、僕らは学校を抜けて歩道に出た。
道路の向かい側には駐在所があり、そこにいるおまわりさんに下級生たちが『さようならー！』と声を張り上げて挨拶をする。
一年生の頃の僕も、これくらいの元気があったのに、何故こうも冷めてしまったのか。大きくなるって悲しいね。
「よお！転校生！」
二列縦隊で歩く行進を無視して、後から竜崎くんが僕の背中をどーんと押してきた。
僕はつんのめりになりつつも、何とか持ちこたえた。いきなり何するんだよ、この子は。
だが、賢い僕は、
「なあに竜崎くん？（ニカッ☆）」
と、形だけの愛想笑いを振りまく。
「ったく、さっきは何やってたんだよー。あいつに放っておけっていったじゃねえかよ」
竜崎くんが親ゆびで指す方向に目を向けると、新垣くんがいた。彼も同じ通学団だったんだ。
新垣くんは最後尾で歩き、遅れないようにしてはいるものの、その足取りは重く、元気がないように見えた。
「ダメだぜ？あいつに触ったら菌がついちまうからな」

「菌って？」
「菌は菌だよ。バイ菌。あらが菌とゆう菌に感染して、お前もあいつみたいになるんだって」
……なんだい、その荒唐無稽な根拠のない話は。
「へ、へぇ、そうなんだ」
とりあえず話をあわせておくことにする。
「ま、だけど俺には予防する力があるからな！神居にもわけてやるって」
そう言って竜崎くんは僕の胸に手を当てて、なにかしら呟いている。
「アバルブベダジュマガラベコーサナゴギアルクレオザー、くぁｗせｄｒｆｔｇｙふじこｌｐ、ｗｚｓぇｃｄｒｆｔｖｇｙばぅんじｍこ」
何語だ。遊×王に出てきたヒエラティックテキストの真似でもしているつもりだろうか。ほら、あの某翼神竜の復活させる。
「よーし！これで一回はあいつに触れても大丈夫なバリアーをしたからな。でも、万が一バリアーが切れてるとき触ったら誰かにタッチするか、えんがちょしろよ。そしたら消えるから」
「うん、ありがとう」
そう言うと、竜崎くんはニヘーッと天使にも悪魔にも見える笑みを浮かべた。
はぁ…なるほど、この手合いのいじめか。名づけるとすれば『〜菌いじめ』。
本能レベルか、上の兄弟、ネットの普及した今なら巨大掲示板等をソースとして伝播してくるのかもしれない。
今のこのご時世、もっと多種多様ないじめが跋扈（ばっこ）しているかもしれないけど。
「じゃ、気をつけろよ。あいつ幽霊だから、いつのまにか教室にいて、いつのまにか触られているかもしれねぇからな」
僕の背中をパンパンと叩き、竜崎くんは後の新垣くんに絡みにいった。

そのやりとりが後方から聞こえてくる。
「ったく、お前もバカだよなー。転校生に絡まないなんて。せっかく根暗じゃねーアピールをするいい機会だったのに。ま、お前みたいな奴は転校生にも見放されちまうに決まってるけどなー」
「うるさい、バカって言うな」
お、反抗した。
「あっ、そういうことといっていいのかなー？お前が昔、体育の時間に――――」
「うわあああ！やめろおおおおおおおおおおお！！」
絶叫が聞こえて思わず後ろを振り向く！
新垣くんが竜崎くんの襟首を掴み、ギリギリと奥歯を噛み締めて目の前に引き寄せていた。
しかし、
「あ？ナメんなよ？」
竜崎くんはその手を力ずくで振り払った後、眉を醜く寄せ額を新垣くんの額にぶつけた。
その威圧感に「ひっ…」と新垣くんが身じろぐ。
「は、ははひひ、びびってんじゃねーよ！ビビり、へたれ、クズ！アホ！排泄物！」
下卑た笑みを浮かべて竜崎くんが次々と罵声を浴びせる。一人間を否定する酷烈な言葉を。
「う、うるさあああああい！！」
「それはてめぇのほうだよっ！！」

バシイッ！

なっ…！
新垣くんが道に倒れこんだ。
竜崎くんが彼の胸をおもいきり殴りこんだのだ。
一緒に帰る下級生たちも、さすがに騒ぎを無視できずにそちらへと

目をむける。
もう勘弁してやれというレベルなのに、竜崎くんはさらにおいうちをかける。
「ったく、こんな場所ででけぇ声だして恥ずかしくないのかよ。お前みてぇのを空気が読めねぇっつーんだよ。ハハハハ」
「お、おいっ！」
僕は慌てて竜崎くんに駆け寄り、彼の肩を掴んだ。
「あ？なんだよ転校生」
「もうそのくらいにしておいたほうがいいんじゃない？これ以上やったら、竜崎くん、きっと面倒なことになるよ？」
「う…。ま、それもそうだな。こいつ、学校イチのチクり屋で、先生がいないとなーんもできねぇ弱虫野郎だから報告されっかもしんねぇし。ったく、小四にもなって恥ずかしくないのかねぇ」
竜崎くんは不遜な態度で通学団先頭を無視し、そのまま一人で歩いていってしまった。
いくらなんでもこれは…。いや、確かに新垣くんが最初に手を出したから悪いかもしれない。
だが、そもそもこれは竜崎くんがふっかけなければ起きなかったことだ。
倒れた新垣くんを心配しながら、顔を覗き込んでみると、彼は僕から目を背けた。
しかし彼からは、注意しないと聞き取れないが、確かに嗚咽が漏れていた。
（悔しかったのかな…）
そうなんだろうな。顔を見られたくなかったのも、きっと泣き顔をさらすのが恥ずかしかったからかもしれない。
さっき竜崎くんにつっかかったのも、辱められプライドを傷つけられるおそれがあったから、それを阻止しようとした結果だ。
弱いくせにプライドだけはいっちょ前、と言ったら聞こえは悪いかもしれないが、だが自尊心のない人間なんているわけがない。

新垣くんは少しだけそれが強い子なのかもしれない。大抵のいじめられっこは、大きな力の前にひれ伏してしまうが、この子は違う。弱くても力を見せて少しでも自分のプライドを保とうとした。その勇気は称賛に値する。
「頑張ったね」
僕は新垣くんに手を差し伸べた。
「えっ…えぅ…ぐ…。…あ……え？」
わけがわからないとでも言うように、新垣くんがまぬけな声をだす。
「だから、頑張ったねって。やるじゃん、僕が君の立場なら竜崎くんにのしられるのを、ただ我慢してただけだよ」
「な、何をいってるの…？それに…ボクのことを放っておいて…って、いったはずだよ？」
「いや、無視できるわけないよ。倒れてる人がいるのにさ。とりあえず立ちなよ、新垣くん」
「ち、違う…ボクはゆうれ―――」
「それはもう良いって」
僕は彼の言い分を強引に遮った。このまま続けたらキリのない問答が始まるに決まってる。
「君は新垣結希くん。そうでしょ？ダメだよ、せっかく両親につけてもらった名前を勝手に改名しちゃ」
「ボクを…その名前で呼んでくれるの？」
「なに当たり前のことといってるのさ。それともなに？君は本当に幽霊だっていうの？」
質問をしたけれど新垣くんは黙ったままだ。
ふと、まわりが静かだな、と思い後ろを振り向いてみると、好初通学団がいつのまにかいなくなっていた。
僕たちは置いていかれたということなのだろうか。……薄情だな。
あの真由さんですら、見捨てていったのか。
「……う…」
「え？」

再び新垣くんのほうへ意識を戻す。
「違う…。ボクは…幽霊じゃない」
泣きべそをかきながら新垣くんは口を開いた。
考え直してみれば本当に幽霊なのか、と訊くべきではなかったのかもしれない。
幽霊とあだ名をつけられた新垣くんにとって、『幽霊』と言う言葉を発することはきっと耐え難いことであったはずだ。
それを少しだけ申しわけなく思う。
でも良かった。彼は自分の口からちゃんと、自分が幽霊でないことを否定した。
「ボクは幽霊じゃ…ない。ボクは…新垣…、新垣結希」
「うん。僕は神居海斗。キミと友達になりたいんだ。もしいいのなら、この手をとってくれないかな？」
そうして僕は再び、彼に手をさしのべた。
新垣くんが伏せていた顔をあげる。目が涙で濡れて、頬には転んだときに付着した砂利が残っていた。
彼はそれらを拭ったあと、触れてはいけないものに触れるようにその手がおそるおそると震えていたが、やがてその小さな手は――

――僕の手をしっかりと握った。

やわらかくて温かい手だった。
初めて握手した日のことを思い出させてくれる、そんな熱い握手。
結衣ちゃんと交わしたあの日のことを。
新垣くんは僕と手を握ったまま、ゆっくりと立ち上がった。
「あの…ありがとう」
「いえいえ、当然のことをしただけだよ。こちらこそありがとう、僕と友達になってくれるんだよね」
「…うん」
返事と共に新垣くんは首肯した。

「ははは、小田桐小での初めての友達だよ。よろしく、新垣くん」
「うん、よろしく、海斗くん」
新垣くんが笑った。優しい顔をして笑う子だ。
心がすぐ表情に出て、とてもわかりやすい子。
だけど、それは彼の心には決して偽りのないことを表していた。そんなふうに思う。
「じゃ、一緒に帰ろう。このまま手をつないでさ」
「うん…。でも、ごめん…」
何が、と問う前に新垣くんが続けた。
「ボクのせいで…通学団に置いてかれちゃって…」
彼の表情が曇り始めた。あー、もう。
「気にしなくていいよ。そんなこと気にしてたら疲れるだけだよ。友達なんだから、そんないちいち気を遣う必要はないよ」
今まで結衣ちゃんしか友達のいなかった僕が、友達のなんたるかを語るなんておかしいな、なんて思いつつもそんな言葉を返した。
「そうかな…。う…ん。そうだよね、そうかも」
良かった。また笑顔になった。本当に良い笑顔だ。
「そうそう。じゃ、気を取り直して…」
――帰ろう。
そう言って僕たち二人は歩き出した。
ははっ、自分で言いだしておいてなんだけど、手をつなぎながら歩くなんて照れくさいな。
でも、これでいい。
これで新垣くんと友達になった日のことを忘れずにいられると思うから。
――引っ越し先でも、たくさん友達できるといいね！
笑顔で僕を応援してくれた結衣ちゃんの言葉を思いだした。
ありがとう。

僕には今日――

はじめて――

男の子の友達ができました。

三章　はじめての男友達（後書き）

一人称が同音なので識別可能なように、
「僕」→海斗
「ボク」→新垣
と、しています。
ボクでもボク少女とかではないので勘違いなさらないように！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6258z/

Shake Hands ～ぼくのはじめての…～

2011年12月20日23時47分発行